

明治前期の塾における会読実践

－ 耕餘塾日誌の分析 －

森 田 智 幸

(山形大学大学院教育実践研究科)

Collaborative reading practices at private schools in the early Meiji period
: An analysis of the “Koyo-Juku Journals”

Tomoyuki MORITA

The purpose of this study is to describe the characteristics of collaborative reading practices (“Kaidoku”) in private academies (“Juku”) during the early Meiji period. In this study, the following two points were clarified. First, the diary of “Koyo-Juku” contains the highest number of entries related to learning activities. The most numerous entries are those related to collaborative reading (“Kaidoku”). Second, through the diary of Koyo-Juku, it was revealed that collaborative reading was practiced routinely. The types of books totaled 22, and the time spent on each book was just under 12 months.

[キーワード] 会読, 私塾, 耕餘塾, 協同的な学び, 日記

1 はじめに：研究の主題と方法

(1) 「会読」の経験

本研究は、明治前期の塾における「会読」実践の一端を、耕餘塾日誌の分析を通して描き出すものである。明治期の「会読」実践については、次の回想がある。

故に輪講の席に出る前には容易ならぬ苦勞をしたものである。しかしこれによって読書力が非常に進んだことは争われぬ。近來のように一教室に多人数を詰め込んで大量教授をする場合にはとてもこんな方法を適用することを得ないが、当時一組の人数は二十人そこそより上には出でていなかったもので、かようなことも行われ得たのであった。しかし今日の大量教授に於いても、これを斟酌した何等かの法を講じたならば学生の読書力を進むる上に大いに貢献するところがあるかと思っているけれども、その実行法はいまだ案出できていない。(平沼 1957)

この回想は、明治 5 年の冬に入門した箕作秋坪の塾、三又学舎での経験についての叙述である。書き手は平沼淑郎。仙台にあった第二高等学校の教授、大阪商業学校の校長、大阪市助役を務めた後、早稲田大学の第 3 代学長を務めた人物である。この回想は、1930 年度の『早稲田学報』に掲載された。注目したいことは、「今日（1930 年ごろ※引用者注）の大量教授」と比較して、輪講が「読書力」の向上に貢献したと振り返っている点にある。輪講は、江戸期以来実践されてきた共同読書の方法の「会読」の一つである¹⁾。数人がグループになり、担当者が対象となる書籍の解釈を説明し、その他の者がそれに対して意見を述べたり、質問をするなどして議論し、テキストの解釈の理解を深めたり、新しい解釈を創造したりしていた（前田 2012）。「会読」について学んだ実感振り返った回想は、平沼だけでなく、石河幹明の『福沢諭吉伝』の自叙伝、菊池大麓の講演録等にも叙述されている（竹村 2012）。

(2) 「会読」実践の展開

「会読」は、江戸期の塾で実践されていた共同

読書の方法で、18 世紀中ごろ以後、藩校のカリキュラム改革を経て全国的に広がった（前田 2012）。明治初期は「会読全盛の時代」だった（前田 2012）。例えば、小川為治は、『学問之法』（1874 年）の「第七編 読書ノ方法ヲ論ズ」で、「会読」の「広大ナル利益」を述べている²⁾。「学制」による構想では、小学校で輪講を実施することになっており、また、自由民権期の学習結社では、実際に「会読」が実践されていた（前田 2012）。他方、平沼の回想にあったように、明治期の塾においても「会読」が実践されていたものの、その実際についての検討は課題として残されている。

（3）耕餘塾日誌という史料

本論文では、明治前期、相模国高座郡羽鳥村（現在神奈川県藤沢市）に設立された塾、耕餘塾の実践に注目する。先行研究は、耕餘塾を明治期神奈川県域における中等教育の代表的な事例として検討してきた。自由民権家、政治家、実業家、学者を輩出したこと（高野 2013）、斯文学会、慶応義塾、政治家や実業家、豪農とつながって運営していたこと（高野 2013）、藤沢地域の中では比較的早い時期に英学の導入を試みたこと（藤沢市教育文化センター1997）を明らかにしてきた。

また、久木(1990)は、耕餘塾の教師小笠原東陽の儒学思想の検討を通して、耕餘塾の民権私塾としての性格を明らかにした。その際に久木が着目した史料の 1 つが耕餘塾の日誌である。久木の研究では、耕餘塾で「会談」が行われていた点に注目していた。久木は、この「会談」を、当時の自由民権運動において実践されていた演説会との関連で読み解いていた。しかし、耕餘塾の日誌を分析すると、「会談」に関する記事は 1 件あるだけである。他方、1 字違いの「会読」に関する記事の数は多数確認できる。「会談」は「会読」の誤記であると読み解いた方が妥当だろう。『藤沢市教育史』の編纂事業により刊行された『藤沢市教育史』史料編第五巻では、耕餘塾関連史料の 1 つとして日誌を収録している。しかし、以後の研究において、耕餘塾で「会読」が実践されていたことには注目していない。

（4）本研究の課題

以上より本研究では、次の課題を設定し、明治前期塾における「会読」実践の一端を描出することを課題とする。第 1 に、耕餘塾日誌の史料的特点を検討する。日誌に記録すべき事項についての

きまりが残されているわけではない。また、記録者も定かではない。そのため、本研究では、まず、日誌に何が記録されているのか、また、いつからいつまでの記事が記録されているのか、2 つの問いに答える形で史料的特点を明らかにする。

第 2 に、耕餘塾での「会読」の実際を検討する。その際、まず、耕餘塾の「会読」実践において、「講ずる会読」である輪講と、「読む会読」である会読とがどのように実践されていたのか明らかにする。その上で、日誌から見えてくる「会読」実践の様子を描出したい。具体的には、どのようなテキストを、どのような順序で、また、どれぐらいの期間をかけて読み進めていたのかについて検討する。なお、第 1 の課題で検討した史料的特点は、言い換えるならば、耕餘塾日誌の史料制約である。本研究は、そうした制約の上での「会読」の実際を描出する作業を試みる。

なお、日誌からの引用については、煩雑さを避けるために、年月日を記すことに留め、引用脚注は付与せず叙述した。日誌の記録が西暦ではなく元号であることを踏まえて、日誌の分析に際しては元号表記により検討をすすめる。また、日誌の引用については、『藤沢市教育史』史料編第五巻に掲載された日誌を使用した。

2 耕餘塾日誌の史料的特点：記録の期間と内容

（1）記事内容から見る耕餘塾日誌的特点

耕餘塾は、明治 5(1872)年 3 月、相模国高座郡羽鳥村に郷学読書院として設立され、明治 10(1877)年 1 月、羽鳥小学校を分離独立し、地域の塾として運営された³⁾。

日誌には、明治 13(1880)年 10 月から明治 18(1885)年 3 月までの 6 年間の記録が残っている。6 年間の総記事数は 179 件である。表 1 が示すように、年によっては極端に記事が少ない年がある。理由は日誌の残存状況にある。明治 13 年は 10 月より前、明治 15 年は 1 月から 4 月、明治 18 年は 4 月より後の記録を欠いているためである。

日誌に記録された事項については、大きく 2 種類に分けられる。1 つ目は、毎年塾として対応していた行事や休業日、地域の祭りや祝日に関する記事である。年始の始業の式である「発会式」、7 月に実施していた半日授業の実施に伴う時程変更、2 か月（明治 16 年 6 月 1 日からは 1 か月に 1 回）実施していた塾生の部屋交換、春、秋に実施して

表 1 耕餘塾日誌の記事内容（各分類左側の数値は実数，右側の数値は年間記事数に対する割合）

「日誌」より作成

	学習		人事		イベント		室替		試験		規則		祝日		合計
明治13	1	0.13	0	0	1	0.13	1	0.13	4	0.5	0	0	1	0.13	8
明治14	5	0.25	1	0.05	7	0.35	0	0	6	0.3	0	0	1	0.05	20
明治15	8	0.25	3	0.09	8	0.25	5	0.16	2	0.06	5	0.16	1	0.03	32
明治16	21	0.33	19	0.3	9	0.14	9	0.14	3	0.05	2	0.03	0	0	63
明治17	19	0.39	10	0.2	7	0.14	6	0.12	4	0.08	2	0.04	1	0.02	49
明治18	2	0.29	4	0.57	0	0	1	0.14	0	0	0	0	0	0	7
	56	0.31	37	0.21	32	0.18	22	0.12	19	0.11	9	0.05	4	0.02	179

いた試験，試験後の休暇や夏季，年末年始の休業日，また，地域の神社の祭りなどがある。2 つ目は，平常とは異なる対応が必要になった事項に関する記事である。教育活動，運営業務を担う幹事や助教の欠勤や出張，欠員などへの対応や，塾生による規則違反などがそれにあたる。

(2) 記事の実際

このような日誌の内容は，記事数の多い順に，「学習」，「人事」，「イベント」，「室替」，「試験」，「規則」，「祝日」の 7 つに分類できる。「学習」には，授業の始業・終業や，半日授業日の時程，塾生数が少ないことによる授業内容の変更，学科の変更，そして，会談に関する記事がある。

「人事」には，塾の教育活動や運営活動を担っていた助教や幹事などの入退塾といった異動，欠員による補充，病気や出張による欠勤，また，それに伴う職務代行に関する記事がある。例えば，明治 16 年 2 月 4 日に「三輪次郎氏退塾に付，鈴木一郎幹事に相口候也」，明治 16 年 5 月 1 日には「三輪二郎氏帰塾に付助教に致候也」とある。助教であった三輪次郎が何らかの理由により塾を離れたため，その間，助教の任務を幹事である鈴木一郎が担った。明治 16 年 4 月 13 日には「鈴木一郎儀病気に付，五日授業相休候事」ともあり，その間，鈴木は病気になり，授業を休みにしたこともあったようだ。

「イベント」には，地域の祭り，同窓会，また，演説会など催し物に関する記事がある。明治 13 年 10 月 25 日の記事には，「本日正午より四つ家山崎屋にて演説会有此候に付，稽古半日相休候事」とあり，演説会の開催に伴って稽古を半日に変更したことが記録されている。毎年 7 月には，多く

の祭りが開催されたようだ。明治 14 年には，9 日「四つ家祭礼」，15 日「当郡鎮守寒川神社祭礼」，20 日「藤沢白旗神社祭礼」，22 日「当村鎮守祭礼」，23 日「同祭」，26 日「辻堂村祭礼」と 6 件の祭りに関する記事がある。

祭りの日には，休業にしたり，塾生に夜の外出を許可したりするなど，耕餘塾は地域の祭りに積極的に参加していた。明治 15 年 7 月 8 日，9 日の記事には「四つ谷祭礼に付，午後十時迄他行相許候事」とあり，午後十時以後の外出を許可している。藤沢市白旗神社，村の祭礼の際にも午後十時以後の外出を許可していた。寒川神社の祭礼の日には，塾を休業にしていた。明治 14 年 7 月 15 日には，「本日者当郡鎮守寒川神社祭礼に付，休業いたし候事」，また，明治 15 年 7 月 15 日には「国幣寒川神社祭礼に付，例により休業候也」とある。明治 15 年，17 年の 8 月 28 日の藤沢招魂社の祭礼についても，同様に休業という対応をとった。このような地域の祭りに関する記事は 24 件あり，「イベント」に分類した 32 件中の 75% を占めている。また，祭礼の時には，「塾中より取集め金一円村社へ寄付候也」（明治 15 年 7 月 22 日）とあるなど，塾内で寄付を募っていた。明治期の塾は，明治政府による教育機関の分類により「私塾」と呼ばれることも多い。しかし，日誌からは，耕餘塾が地域の教育機関として運営されていた様子が見えてくる。

「室替」は，2 か月に 1 回のペースで行われた塾生の生活する部屋の交換に関する記事のことである。「室換」とも表記されている。なお，定期的に行っていた障子の張替や，不具合が生じたときに行われた部屋の修繕もここに分類した。

「試験」は、春、秋に1回ずつ実施されていた試験に関わる記事である。また、「規則」については、「賄料」の改定や蚊帳の取り扱いの規則の設定、また、塾生の規則違反とそれに対する処分に関する記事である。「祝日」は、天長節、紀元節、秋季皇霊祭の記事がある。毎年記載されているわけではない。

以上の記事の分類の結果見えてくることは、明治16年、17年の「学習」、「人事」の記事の大幅な増加である。明治15年と比較したとき、明治16年の総記事数は31件増加している。「学習」は13件、「人事」は16件で合わせて29件となり、この増加は2つの事項に関する出来事の記事が増加したことによる。「人事」の増加については出張、病欠、異動の記事の増加がある。教師小笠原東陽の東京出張が5件、助教や幹事の病欠が4件ある。また、助教の三輪の退塾（明治16年2月4日）をめぐる対応が5件ある。

「学習」に関する記事は、「人事」に関する記事は明治17年には減少する一方、明治17年になっても依然として多いままである。この増加は、「会読」の記事が増えたためである。明治15年から17年まで、「会読」に関する記事は、「学習」に関する記事の約5割を占めている（表2）。以下、続く章では、耕餘塾における「会読」について検討しよう。

3 耕餘塾における「会読」

(1) 教則、塾則から見える「会読」の実態

耕餘塾は、明治5(1872)年3月設立時から明治18(1885)年7月の「教則」改訂により学科として「英漢学」を掲げるまで、「読書」を学科の1つとしていた⁵⁾。耕餘塾としての発足を前にした明治9(1876)年12月「小笠原東陽塾教則」には、「級外の書目大概を掲ぐ、五級以上余力あれば独見又は輪講し疑義を質問すべし」とある⁴⁾。5級以上の塾生は、「余力」の範囲内で、「級外」に掲げた書籍を独りで読む、又は、疑問を質問し、輪講することが求められていた。

5級より下の塾生の学び方はどうだったのだろうか。明治15(1882)年12月、神奈川県宛に提出した報告「小笠原東陽私塾記録」の中に「五学科の要略」がある。「五学科」は、「修身」、「読書」、「作文」、「算術」、「習字」である。その中の「読書」について、以下のように説明されている。

表2 「学習」の中の会読の件数
(左は実数、右側は割合)「日誌」より作成

	学習	会読	
明治15	8	5	0.63
明治16	21	10	0.48
明治17	19	8	0.42
合計	48	23	0.48

和漢書類洋書翻訳類なり。大部の歴史は会読に付し、其余は大抵輪講に属す。級外須読書目大概を掲ぐ。五級以上余力あれば独見或は輪講し疑義を質問せしむ⁶⁾。

この説明によると、耕餘塾での学び方は、5級以上の塾生だけでなく、それ以外の塾生も、輪講によって学んでいた。「大部の歴史」の書籍を会読（「読む会読」）し、「其余は大抵」、つまり、その他のテキストはほとんど輪講（「講ずる会読」）を通して学んでいた。

耕餘塾における輪講の様式については、藤沢市立明治小学校所蔵史料『東陽小笠原先生事蹟』に、「五 耕餘塾教授ノ概況」の「(四) 教授ノ形式」に記録されている。「明治十五年前後の状況」であるという但し書きがついた上で、当時の教授の様子が以下のように叙述されている。

講義をなすものは予め抽籤により当りたる者の前後の二人之に当る。而して言語はつとめて了解し易き様、常に注意せしめられたりと⁷⁾。

輪講では、「講義」の担当者が決められていた。ここで言う「講義」とは、現在イメージされる「講義」とは異なり、塾生が書籍の解釈を説明する、つまり、義を講ずる行為を意味する。その「講義」の担当者は「抽籤」によって決められていた。「抽籤」で担当者を決める方法は、江戸期からよく使われた方法だった。耕餘塾では、「抽籤」で当たった人ではなく、その前後の2人が「講義」を担当することに決まっていたようだ。

「講義」の担当者は、輪講の参加者にとってわかりやすい説明を心がけることだった。「講義」の担当者以外の参加者は、積極的に「疑義」を「質

問」し、議論していた様子が推察される。先に紹介した平沼の回想の中にも、輪講については「容易ならぬ苦勞をした」とある。その理由は、講義の担当となったときには、様々な質問に答えるための準備が必要となったためである。耕餘塾の輪講においても、担当者が十分な準備をして講義し、それに対して参加者が疑義を質問する活動が行われていたのだろう。

耕餘塾の「塾則」からは、塾生同士の読書活動の日常を垣間見ることができる。「塾則」には、以下の規則が掲げられている。

- 一 看書は黙読を良とす。発声するも須らく低くすべし
- 一 寝柝後は声読を禁す
但作文時間尤発声を禁す⁸⁾

塾生の中には、声に出しながら書籍を読む塾生もいたようだ。読むことに夢中になっていると、その声が大きくなってしまいうこともあったのだろう。就寝時刻を知らせる拍子木（「柝」）の後には、声に出して読まないよう規則が定められていた。また、作文の妨げになるほど、本を読む声が聴こえてくることもあったようだ。黙読を推奨し、音読についての声量に注意する塾則は、塾生たちが日ごろから本を読み、授業に備えていた様子を示している。

「塾則」には、続けて以下の決まりが掲げられている。

- 一 室内声高争論を禁ず。若し学業上論ずべき事あらば、相互に教場に於てし、教師の採決を得べし。苟も凌侮詬罵に涉れば、双方禁を犯に坐せしむ⁹⁾

塾内では、つい声量が大きくなるほどの議論が展開されることがあったようだ。「声高争論」を禁止する規則は、塾生同士が議論する耕餘塾の日常を示している。「争論」は「凌侮詬罵」に及ぶこともあったようだ。その場合は双方が罰せられるという規則だった。また、この規則は、「争論」を禁じているわけではない。「学業上」必要なことは「教場」で行うことが許されていた。「声高争論」につながる可能性のある議論については、教師の採決を以て実施するというルールまで決められていた。

(2) 日誌から見える輪講と会読との関係

教則では、耕餘塾の輪講について言及されていたが、日誌には輪講の記事は 1 件も確認できない。一方、日誌は、「読む会読」である会読の実施についての記事が先に示した表 2 で確認できるように数多く記録されている。

会読に関する記事の中に、以下のような記事がある。

塾生帰省に付未整集依而免当日共政記・孟子・蒙求・元明史略之分会読之事（明治 18 年 1 月 15 日）

日誌には、毎年 1 月には、帰省先から戻ってくる塾生が少ないうために、授業内容を変更した記事がある。明治 18 年 1 月 15 日は、当初予定されていた『政記』、『孟子』、『蒙求』、『元明史略』の授業を会読することで対応したと記録されている。こうした記録からは、耕餘塾の授業における読書の活動は「講ずる会読」の輪講であり、その補助として「読む会読」である会読を実践していたことがわかる。時期は前後するが、明治 17 年 10 月 30 日には、以下のような記事が記録されている。

千葉海到不在に付孟子・政記隔日先生の会読之事（明治 17 年 10 月 30 日）

千葉海到は、当時幹事として塾の教育、運営にあたっていた。明治 17 年 10 月 22 日、その千葉が病氣のため、横浜の病院に行くことになり、塾をあけることとなった（「幹事千葉海到病氣にて療養のため横浜へ出立候事」明治 17 年 10 月 22 日）。塾では通常通りの授業、つまり、輪講を実施することが出来ず、先生（小笠原東陽）と『孟子』と『政記』を会読することで対応したという。

(3) 日誌から見える会読の実際

日誌には、表 3 に示すように、何の書籍の会読を始めて、いつ終了したのかを記録している。耕餘塾の日誌で最初に確認できる会読に関する記事は、明治 15 年 6 月 1 日『莊子』の会読が終わったことを示す記事である（表 3）。同年 6 月 10 日にも同様に、『明律』の会読が終わったことを示す記事がある（表 3）。『莊子』、『明律』の会読を始めた記事は日誌上に確認することはできない。しかし、これらの記事は、明治 15 年 6 月 1 日以前から

表3 日誌中の会読記事の例（明治15年6月の記事一覧） 「日誌」より作成

15年6月	1日	本日莊子会読相終り候
	2日	本日より莊子に引続き詩経会読相始め候事
	10日	本日明律会読終り候事
	12日	本日より明律ニ続き八家文会読相始免候事
	30日	万国史略会読相済候に付、漢史一班会読相始候事

耕餘塾では会読を実践していたことを示している。

明治15年6月2日の記事は、『莊子』が終了したことに伴い、『詩経』の会読を始めたことを記録している（表3）。また、同年6月12日の記事は、『明律』の会読終了に伴い、『八家文』の会読を始めたことを記録している。6月30日の記事も同様である。『万国史略』の会読を開始した記事を日誌から確認することはできないが、それに引続き『漢

史一班』の会読を始めたことを記録している（表3）。

日誌に記録されている「会読」に関する記事を、何のテキストを、いつ開始し、いつ終了したのかに着目して図示したものが図1である。また、表4は、会読していた書籍と教則との対応を整理したものである。明治15(1882)年12月、神奈川県宛に提出した報告「小笠原東陽私塾記録」による

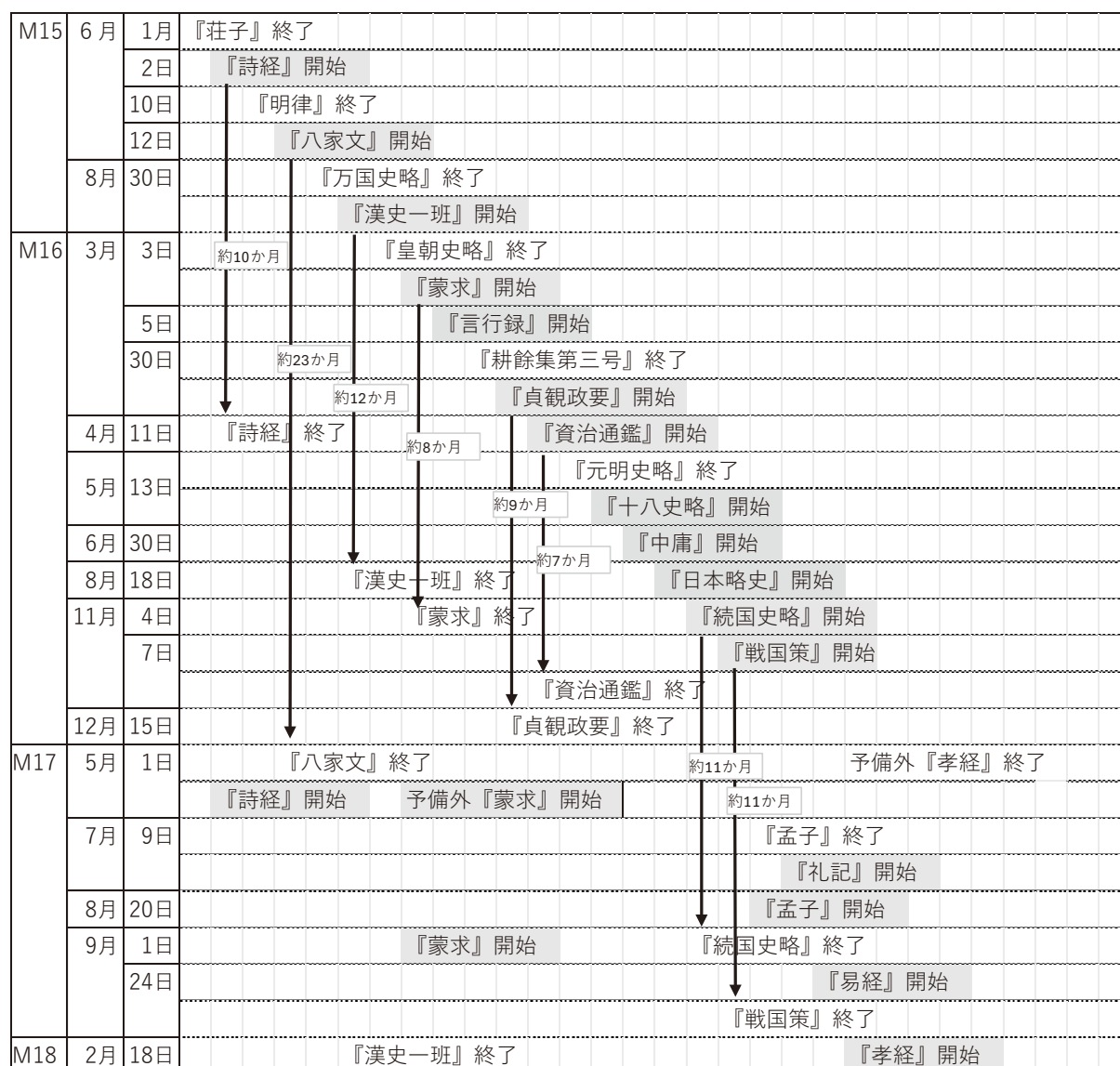


図1 会読の実際 「日誌」より作成

表 4 書籍と教則との対応
「日誌」より作成

書籍名	教則上の等級
『日本略史』	予備下級
『万国史略』	予備上級
『孝経』	予備外
『漢史一班』	第八級
『蒙求』	
『孝経』	
『皇朝史略』	第七級
『十八史略』	
『続国史略』	
『元明史略』	第六級
『孟子』	
『中庸』	第四級
『八家文』	
『詩経』	第三級
『資治通鑑』	第二級
『易経』	第一級
『莊子』	級外
『明律』	
『言行録』	
『貞観政要』	
『戦国策』	
『耕餘集第三号』	該当等級なし

と、耕餘塾では、「大部の歴史書」を会読の対象書籍として、その他ほとんどの書籍について輪講の対象としていた¹⁰⁾。日誌からは、「予備」の等級の『日本略史』、『万国史略』、「第七級」の『皇朝史略』、『十八史略』など、「大部」かどうかは判断が分かれるが、確かに、歴史書を会読していたことを確認できる。他方、「小笠原東陽私塾記録」の記録とは異なり、歴史書だけでなく、儒学の経書、その他の書籍も会読していたことも読み取れる。図1で確認できるように、『孝経』、『蒙求』、『漢史一班』といった第8級の書籍は複数回会読していた。このことを踏まえると、入門期にあたる等級と、教則を超えたレベルの級外の書籍についての会読が多かった。

そして、1冊について約10か月かけて会読していた。表5は、書籍の会読期間を整理した表である。『八家文』の約23か月だけが突出して長い。ため、記録の欠落があった可能性がある。それを除くと、1冊を会読する期間は、短いもので約8か月、長いものは約12か月かけて会読していた。た、複数の書籍の会読が同時に並行して実施されていた。明治16年3月5日『言行録』の会読開始時に注目すると、この時、すでに『詩経』、『八家文』、『漢史一班』、『蒙求』の会読が行われていた。こ

表 5 書籍と会読期間
「日誌」より作成

書籍	期間
『蒙求』	約8か月
『貞観政要』	約9か月
『詩経』	約10か月
『戦国策』	約11か月
『続国史略』	約11か月
『漢史一班』	約12か月
『八家文』	約23か月

の時期には、同時に5冊の会読が耕餘塾で実践されていた。『詩経』は第3級、『八家文』は第4級、『漢史一班』、『蒙求』は第8級、そして、『言行録』は級外に該当する。異なる等級に属する塾生が、それぞれ会読をしていたようだ。なお、明治16年、耕餘塾では55人の生徒が学んでいた¹¹⁾。

4. おわりに

本研究では、耕餘塾日誌の分析を通して、明治前期の塾における「会読」実践の一端を描出することを主題としていた。その際、第1の課題として、耕餘塾の「日誌」の史料的特徴を検討することを設定した。「日誌」からは、「学習」に関する記事、その中でも、「会読」に関する事項が多く記録されていることを確認することができた。「日誌」の記事の分析を通して、耕餘塾が「会読」を日常的に実践していた塾であったことを明らかにすることができた。なお、耕餘塾と地域とのつながりについても描出することにつながった。耕餘塾では、地域の神社の祭りがある際には、塾生からお金を集めて寄付をしたり、塾生の夜間の外出を許可したりする等、地域の祭礼に関与していた。明治期「私塾」は、地域の教育機関として機能していた。

本論文の第2の課題は、耕餘塾における「会読」の実際を描出することにあつた。耕餘塾の授業では、どの等級の生徒も「講ずる会読」である輪講を通して学んでいた。本論文の最初に示した平沼の回想は明治初期の経験である。こうした実践は明治期に入ってからすぐに消えたわけではなく、継続して実践されていた。耕餘塾では、「塾則」において禁じられるほど、授業外、塾内で積極的に議論が行われていた。塾生の議論は日常の風景だった。

日誌には、「読む会読」である会読について記録されていた。会読で塾生が読んでいた書籍は、「大

部の歴史書」だけではなく、儒学の経書等、22種類にのぼった。期間は、1冊あたり約12か月。1冊をじっくり読み合っていたようだ。

異なる等級の5冊の書籍が同時に会読されていたことも明らかになった。会読は、日々、日常的に行われ、塾生にとっては当然の風景だったに違いない。耕餘塾が教則を改訂し、学科として「読書」ではなく「英漢学」を掲げるようになるのは明治18年7月である。他方、明治19年2月の教則には、依然、輪講に関する言及がある。本論文では、学科の変更を時期区分として採用し、また、日誌の史料的制約により、明治15年から17年の会読の様相の検討が中心となった。しかし、この事実からは、「英漢学」へと教則を改訂した後も、「会読」の実践が展開された可能性もある。史料的制約により、耕餘塾の事例ではここまでしか明らかにできない。今後、他の事例を通して、明治前期の「会読」実践の様相を検討することが今後の課題である。

注

- 1) 会読には、お互いの解釈を討論する「講ずる会読」である輪講と、テキストを共に読む「読む会読」である会読とがあった。本論文では、以下、「読む会読」については会読と表記し、「講ずる会読」については輪講、また、「講ずる会読」と「読む会読」の両方を表現するときには「会読」と表記する。
- 2) 小川は以下の通り「会読ノ益」を指摘している。書籍を部屋で独り読みふけても、「識見孤陋」となり、「実際ノ益」とはならない。読書を通して知りえたことを「師友ノ間」で「質問」し、「真偽可否」を確定することを通して、即ち、「討論」をへることで、どのような場所、どのような人にも明晰に説明することができるようになる(小川為治(1874)『学問之法』第七編、西山堂)。
- 3) 耕餘塾の成立年代をめぐっては校舎を独立した明治10年1月説と、行政機関への届け出書類を確認できる明治11年1月説とがある(高野修(2013)『小笠原東陽と耕餘塾に学んだ人々』藤沢市史ブックレット4)。使用書籍や教育方法を記載した教則を検討すると、明治9年3月にはすでに耕餘塾で実施する教則ができていた。そのため、本論文では、教則を用意した上で、

独立校舎として運営が始まった明治10年1月説をとった。

- 4) 「小笠原東陽塾教則」(明治9年12月)、藤沢市教育文化センター編(1997)『藤沢市教育史』史料編第五卷、藤沢市教育委員会、99-100頁所収。
- 5) 「私塾発蒙次第」『日本教育史資料』巻九「郷学」352-353頁、「耕餘塾課業式」(明治18年7月)前掲『藤沢市教育史』史料編第五卷、104-107頁。なお、「輪講」の記載は、明治19年2月「改正耕餘塾教則書」まで確認できる(「小笠原東陽私塾記録」前掲『藤沢市教育史』史料編第五卷、22-26頁)。
- 6) 「小笠原東陽私塾記録」(明治15年12月)前掲『藤沢市教育史』史料編第五卷、22-26頁。
- 7) 明治小学校(1920)『東陽小笠原先生事蹟』(大正5年8月12日)前掲『藤沢市教育史』史料編第五卷、45頁。
- 8) 「塾則」(明治13年2月)前掲『藤沢市教育史』史料編第五卷3-6頁。
- 9) 同上史料。
- 10) 前掲「小笠原東陽私塾記録」(明治15年12月)
- 11) 前掲『藤沢市教育史』第五卷資料編、43頁。

引用文献

- 藤沢市教育文化センター編(1997)『藤沢市教育史』史料編第五卷、藤沢市教育委員会。
- 久木幸男(1990)「自由民権運動と儒学教育-小笠原東陽の場合」『佛教大学報』第四十号。
- 平沼淑郎(1957)「鶴峯漫談」『近世寺院門前町の研究』早稲田大学出版。
- 前田勉(2012)『江戸の読書会-会読の思想史』平凡社。
- 高野修(2013)『藤沢市史ブックレット4 小笠原東陽と耕餘塾に学んだ人々』藤沢市文書館。
- 竹村英二(2012)「江戸後期における儒学テキスト読解の作法—『練熟』『組織セル念慮』の醸成装置として—」『日本研究』No. 46、国際日本文化研究センター、101-123頁。